

## ウォーミングアップ その1

### 教育研究における研究の進め方を整理する

研究は、その方法や対象などの視点によってさまざまな分類があること、研究と報告の異なる部分については先に述べた。それでは、研究の構成要素としては何が必要なのだろうか。研究が研究として成立するための要素を明らかにする。

#### ■ 研究の基本パターンとは

研究に基本パターンはあるのだろうか。

牧野<sup>7)p162</sup>は、研究の手順の基本の形を次のように示している。

研究目標の設定－実態の把握－研究仮説の設定－検証－考察

また、西田<sup>6)p24</sup>は、研究の基本的手順として、探究的な研究の基本形を次のように述べている。

研究が探究的に行われるためには、**観察**→**仮説**→**検証**の3段階を経過しなければならない。学校現場の教育研究も例外ではない。

研究問題が探究的に追求されるためには、**観察**→**仮説**→**検証**の3段階を経過することが絶対に必要であることはすでに述べた。この過程は実際には直線的に進むものではなくて、ジグザグコースを経て行われるものである。

すなわち、この**観察**、**仮説**、**検証**が、研究が研究として成立するために必要な段階であると理解することができる。なお、本稿における**観察**、**仮説**、**検証**の表記は、実際の研究行動としての観察行動、仮説設定、検証作業を指すのではなく、時系列的な研究段階としての**観察段階**、**仮説段階**、**検証段階**を指すものである。

実際に行われている研究の実態から、**観察**、**仮説**、**検証**それぞれの研究段階にあたる部分を、イメージしやすいように実際の研究行動の例で具体化してみると、次のようになる。

<b>観察</b>	実態把握、実態調査、問題点の把握・抽出、資料収集
<b>仮説</b>	目指す子ども像・目標の設定、方法・計画の模索・追求・設定
<b>検証</b>	計画や方法の試行・実践、効果観察、評価、分析、考察、今後の課題、まとめ、提案

ただし、これらの研究行動は、例えば「ある研究では**観察**のために資料収集を行うが、ある研究では**検証**のために資料収集を行う」、「**観察**で課題を見つけ出すための考察をし、**検証**で実践効果を確認するための考察を行う」というように、その研究段階によって性質が変化する。

組織マネジメントなどで用いられるPDCAサイクルにあてはめると、P (plan) は**観察**と**仮説**、D C A (do, check, action) は**検証**にあたるものである。

## ■ 研究が研究として成立するには

それではこの3つの段階をすべて踏まなければ研究ではないのだろうか。このことについて、西田<sup>6)</sup>p27は、次のように述べている。

研究は、**観察**→**仮説**→**検証**の3段階を経て一連の研究は終わるが、研究によっては、**観察**→**仮説**、**仮説**→**検証**でも立派な研究になる。多くの研究を見ると、**観察**または**観察**→**仮説**までで終わり、それから先の研究の深まりとか継続がみられないのは残念である。

先に、研究の定義を、「研究とは、何らかの事実や事象を根拠を持って明らかにしていく作業である」と述べた。

どのような段階を経ようとも、研究として行う限り、「検証によって“新たな事実”を明らかにする」、または「観察や調査を通して“新たな課題”を明らかにする」というねらいを持って研究を進めることは不可欠である。そのためには、**事象の因果関係や相関関係の追求、問題点の抽出や新たな提案などの考察を充分に行うことが重要である。**

本稿では、以上の研究段階をもとに、研究パターンを次のⅠ～Ⅲの3つの型に設定した。

研究パターン	具体的な流れの例
I型 <b>観察</b> → <b>仮説</b> → <b>検証</b> 型	<b>実態把握・課題の発見</b> → <b>課題解決の方法設定</b> → <b>実践・考察</b>
II型 <b>仮説</b> → <b>検証</b> 型	<b>方法・手段の設定</b> → <b>実践・考察</b>
III型 <b>観察</b> → <b>仮説</b> 型	<b>実態分析・データ収集</b> → <b>考察・課題や事実の発見</b>

また、教育研究における研究手法としての演繹的研究、帰納的研究は次のように考えられる。

帰納的研究・・・さまざまな事象から、ある仮説や事実を導き出す研究  
 演繹的研究・・・ある仮説や事実の、さまざまな事象における結果等を考察していく研究

一般に研究は、帰納的な部分と演繹的な部分が相互しつつ行われる。

上のⅠ～Ⅲ型は例えば次のように考えると、研究の組み立てを明確にできる。

I型→様々な事象等から課題を見つけ、  
 それを解決する手法等を検討し、＜帰納的研究＞  
 その手法の事象への効果等を  
 明らかにしようとする研究 ＜演繹的研究＞  
 II型→既にある仮説や方法について、事象への効果等を  
 明らかにしようとする研究 ＜演繹的研究＞  
 III型→実態や事例分析などを通して、一定の事象や課題等を  
 明らかにしようとする研究 ＜帰納的研究＞

